

萱

2019·8

# 風萱集

木村 嘉男

水無月のけふそこぬけに晴れにけり  
懐郷に病んで一日を五月雨るる  
黒南風や冥みも深き平林寺  
合歡咲くか高島茂の忌ぞちかみ  
軍港蔵す馬が灯を提げ海霧へ消ゆ

亀田虎童子

朝風を乱さぬ 一步 一步 かな  
手足などどうでもよくて葱坊主  
揚羽蝶 令和の風を乱さずに  
売れさうで売れなささうで夏蜜柑  
サングラス 老人の顔 緊りたる

出牛 進

夏の雨止まぬと見しが夕日影  
薔薇園の薔薇カタカナの名に咲けり  
青葦や葉擦れの音の渦を巻く  
さつき散る薬の長きを残したる  
三つ 四つ 鳴いて 一拍 四十雀

松下 道臣

凍てもどり奥歯カチカチ鳴らしたる  
初蝶の手品のやうにあらはるる  
誓子の忌遠くの星に手をかざす  
花むしろ紙のコップに紙の皿  
痩せるつぼせつせと圧せる四月馬鹿

小島 良子

かまきりに振り向かれたる我が齡  
鶏卵の中の空気や梅雨に入る  
ゆつくりと動く断層草いきれ  
富士塚の溶岩尖り梅雨に入る  
父の日や五體字鑑の重たくて

# 萱集

進選

梅雨入やお喋りに行く美容院  
東京 飯塚トシ子

水影に雲間の日差し末草  
山法師一息入れて折り返す

鈴木記念館

夏の雲間取り昭和の我が家かな  
床の間にデジタル時計風薫る

ひと葉打つ音に始まる梅雨入かな  
東京 武川 未有

京マチ子逝く青葉に閉づる羅生門  
水撒きのしづく校庭リレー待つ  
濃く淡く蛍の闇の半世界  
熟れ麦の風にペダルを運ばせて

アマリス長き石段見あげをり  
埼玉 鈴木 愛子

青梅雨やガンジー像の脛細し  
葎の花猫低うして通り抜く  
山すそを二輛電車や桜桃忌  
梅雨の月河口に近き街灯り

蚊遣火に酔ひまどろみの甲夜かな  
ひとしきり蛍の揺れて消えにけり  
石段の手すりに体み若葉風  
ちよこちよこと園児の列の夏帽子  
東京 野村 宏

葉漏れ日に故山の気配青葉闇

東京 ふなかわのりひと

行く春や母の間ひあげ讃仏偈  
万葉の故地なる故郷あいの風  
老鶯や二上山を幾世代  
夏立つや清き磯みの雨晴  
旅装解き一日遅れの菖蒲風呂

千葉 光成 敏子

山焼きを終へ山水のうまきこと  
どの家も巢燕のゐて夜の静か  
お狩場の窓を覗けば姫女苑  
暮れてすぐ蛙鳴き出す水の郷  
鉄の戸の内なる蔵書桜桃忌

千葉 中山 恵子

父の日や戸棚に眠る古時計  
紫陽花や窓開けておく勝手口  
膝に乗る猫の重さや梅雨深し  
居るはずの無い母の声沙羅の花  
コクトーもラディゲも青春ソーダ水